

中央での戦いも山名宗全・細川勝元の相次ぐ死や敵戦気分の蔓延で終息に向かい、文明9（1477）年、乱は終結します。帰国した大内政弘は北部九州を制圧し、留守の間に乱れた領国の安定化に乗り出します。現存最古の城指で鏡山城の管理規則を定めた『安芸国西条鏡城法式条々』5か条が定められたのはその翌年文明10（1478）年のことでした。

大内氏の直轄城の指揮官は「城督」と呼ばれていました。鏡山城督は東西条代官が兼務しており、内藤弘矩、杉武明、杉弘相、陶興房ら守護代級の重臣が任命されていました。重臣は山口での公務があるため常駐できないことから、「小郡代」と呼ばれる又代官を置いて留守の管理をさせていました。鏡山城では大内氏に従う東西条衆と呼ばれる中小武士団が交代で城番を務めており、「鏡城衆」と呼ばれていました。また、鏡山城には城の維持管理費に充てるための城料所として原村（現、八本松町原）に50貫文の土地が設定されていました。

大永2（1522）年、陶興房が東西条代官に就任します。興房は大内家の重臣筆頭で周防守護代を兼ね、大内義興が最も信頼を寄せる武将です。次の古文書は興房が鏡山城に登城した際、平賀弘保から贈られた祝儀に対する礼を述べたものです。これは東西条代官への就任祝であったとみられ、鏡山城に入ることが東西条代官に就任することと同義だったことを示していたと考えられています。



陶興房書状（広島大学図書館寄託「平賀家文書」）

翌大永3（1523）年6月、出雲の戦国大名尼子経久が安芸国に侵入し、国人らを味方につけて鏡山城を攻撃します。東西条代官の陶興房は山口にあって留守であり、城は蔵田備中守房信・市地国松らの東西条衆が守っていたようです。この戦いに関しては、毛利元就の調略による落城が伝えられていますが、根拠となる軍記等は毛利元就の功績を称えるための読み物であり、ほぼ創作されたものです。鏡山落城に当たって最も重要な役割を果たしたのは、600貫余りの地を増された平賀弘保であり、毛利氏にあっては70貫を増された粟屋元秀であったと推測されます。

鏡山城跡の中心部に当たる1〜5郭では火災の痕跡が顕著に見られ、落城に当たって城が焼け落ちたことが考えられます。

尼子経久に不意を討たれて鏡山を落とされた大内氏は、陶興房を総大将に反撃に出、大永5年にはほぼ安芸国の全域を奪回することに成功します。陶興房は西条盆地の西端に杣城（曾場が城山）を築いて新たな拠点としたため、鏡山城はその役割を終えました。

■所在地 東広島市鏡山二丁目（鏡山公園内）
指定面積 104.031.35㎡（登記簿上）
指定年月日 平成10（1998）年1月14日

■問合せ
東広島市教育委員会生涯学習部文化課 Tel 082-420-0977（直通）

■大内氏

大内氏は、百済王族に出自を持つと伝えられ、平安時代には周防国府の有力な在庁官人となっていました。南北朝時代には山口に本拠を移し発展の基礎を築きます。義興の時、応永の乱を起こし一時勢力を削減されましたが、盛見以後幕府の九州経略上の実力者として重きをなし、周防・長門・豊前・筑前の守護に任じられました。15世紀半ば、教弘は山名氏と結び、瀬戸内海東半部に勢力を張る細川管領家と瀬戸内海の權益を廻って対立するようになっていきます。子の政弘は応仁・文明の乱で西軍の主力として活躍し、文化人としても高く評価されていました。戦国時代、義興は足利義尹（義材・義植）を擁して上洛し、幕府の管領代として10年にわたって勢威を振るいました。安芸国との関わりでいえば、鏡山城の城主であり、国内の豪族の多くを傘下に収めていました。



大内義興騎馬像（山口県立博物館蔵）

毛利興元、小早川興景、平賀興貞、天野興定、阿曾治興郷、野間興勝、厳島興親らは義興から名前の一文字を受けた者たちです。義興の子義隆の時代には周防・長門・石見・安芸・備後・豊前・筑前7カ国の守護を兼ね、西国随一の勢力を誇りました。

大内氏は、朝鮮や明との通交につとめ、学術工芸を奨励し、キリスト教の布教を許すなど、独特の山口文化を育みました。天文20（1551）年、重臣陶隆房（晴賢）は謀叛を起こして義隆を討ち、その甥義長を擁立しましたが、天文24（1555）年、毛利元就と厳島に戦って敗死し、大内氏は弘治3（1557）年滅亡しました。



史跡鏡山城跡の位置図



国指定史跡

鏡山城跡



鏡山城跡遠景（北東から）

東広島市教育委員会

■鏡山城の歴史

鏡山城は「鏡城」とも呼ばれ、古文書等に初めて名前が見えるのは寛正6（1465）年頃と考えられる小早川熙平宛細川勝元感状文（小早川家証文）です。南北朝時代から戦国時代前半にかけて、現在の東広島市の大部分と呉市の一部は「東西条」と呼ばれ、南北朝時代の1360年代以降、周防山口を本拠地とする周防・長門守護大内氏の領地となっていました。

応仁元（1467）年、將軍家の後継者争いや、管領家である斯波家と畠山家の家督争い、各地の守護の家督争いや権力争いが複雑に絡み合い京都を舞台に応仁・文明の乱が勃発します。管領細川勝元を中心とした勢力は東軍と呼ばれ、山名宗全を中心とした勢力は西軍と呼ばれました。

この頃の大内氏は政弘を当主とし、東西条代官として仁保弘有を鏡山城に置いていました。乱が始まると、山名氏の要請を受けた大内政弘は大軍を率いて上洛し、西軍の主力として東軍を圧倒します。京の都を廃墟にし、戦いは地方へも波及していきます。文明2（1470）年になると、劣勢の細川勝元は山口で留守を預かっていた政弘の叔父大内道頓を東軍に誘うことに成功します。これにより本国に残っていた大内氏重臣の多くが東軍に寝返りました。摂津（現、大阪府の西部と兵庫県の一部）で東軍と戦っていた東西条代官仁保弘有も大内道頓に呼応し、東西条衆（東西条を本拠地とする中小武士団）の多くとともに東軍に寝返ります。



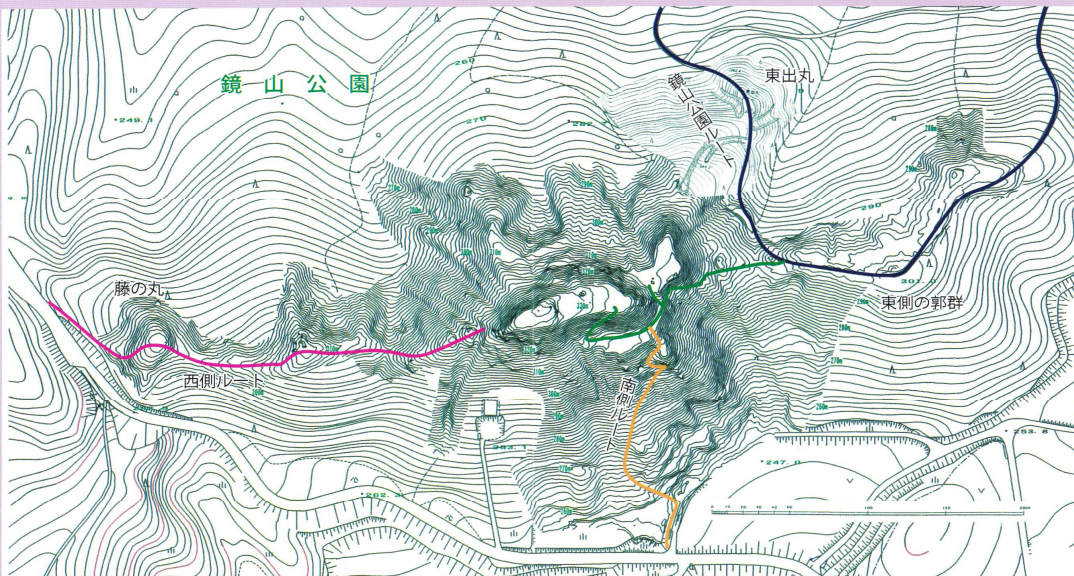
絹本着色仁保弘有像（源久寺蔵、写真は山口市教育委員会提供）

翌文明3（1471）年、仁保弘有は東西条に帰り、鏡山城を拠点に周防の道頓や備後守護山名是豊らと連携して東西条の経略を進めていました。これに対し周防・長門では、周防守護代陶弘護が奮迅の活躍で西軍を糾合し、大内道頓を破ります。また、大内政弘は新たに安富行房を東西条代官に任命し、平賀氏らの軍勢とともに安芸国に南下させ鏡山城を包囲させます。東西条代官安富行房は同年7月から8月を経た10月半ばまでの約4カ月間にわたって鏡山城の包囲攻撃を続けます。その間、仁保弘有は備後の山名是豊らに援軍を頼みますが、鏡山城を救う軍勢が来ることはありませんでした。

10月中旬、鏡山城は生命線である水の手（水汲み場）を敵に占領され、遂に力尽きます。鏡山城を救えなかった東軍は残党を集めて東西条で徳政一揆を企てます。しかし、この一揆も毛利氏らの活躍で鎮圧されてしまいました。

文明7（1475）年には、東軍の備後守護山名是豊も安富行房らの活躍で備後を逐われ、安芸・備後での戦乱は西軍優勢のうちに終息しました。

安芸国西条鏡城法式条々（大内家壁書）



史跡鏡山城跡案内図



鏡山城跡遠景 (南から)



1郭基壇状遺構と2郭(1郭から)

■鏡山城跡の遺構

鏡山城跡の遺構は、標高335mの山頂を中心に東西南北約300m四方の範囲に展開しています。

麓近くまで延びる堅堀を伴った堀切を東西に配し、その城内側には高大な切岸(城壁に相当する崖)を造ります。

最高所の1郭は、「御殿場」と通称され、「中のダバ」と呼ばれている東側の2郭とともに主郭を構成しています。主郭の周囲は13～23mの高さの切岸で囲まれ極めて固い守りとなっています。

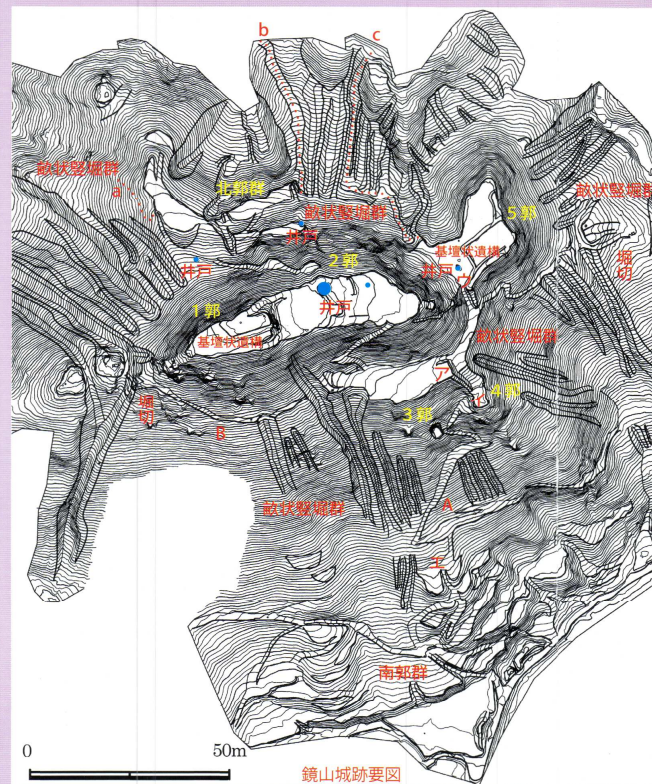
1郭の北東部には礎石を伴う東西約15m、南北約8mの



畝状堅堀群(3郭南側)

長方形の基壇状遺構があり、象徴的な建築物があったことが推測されます。

2郭でも数棟の礎石建物跡や基壇状遺構が確認され、多くの建物が立ち並んでいたと考えられます。3郭は「馬のダバ」と呼ばれ、2郭の南、約18m下に位置します。西側を大堅堀で区切り、堅堀に面して土塁を設けています。土塁は北端のみ石積みで補強されており、西側尾根筋への通路(B)と結ぶ橋が架かっていたと思われます。土塁から東側の塁線は屏風折れに造られ、「横矢」と呼ばれる側面防衛の工夫が明瞭です。3郭の東端には虎口(A)が開口し、



鏡山城跡要図

2郭を守る前衛の役割を果たしています。3郭の東には4郭・5郭に通じる幅の広い通路があり、4郭と組み合わせられて複雑な虎口(I)を形成しています。その位置と構造から大手門の跡と推測される4郭は、石垣と土塁で固められており、崩壊した石段を見ることができます。

5郭は「下のダバ」と呼ばれ、2郭の東、約13m下に位置しています。2郭とは直接連絡しておらず、2郭に行くためには、南側の虎口(ウ)から3郭を経由する必要があります。

5郭は南端に土塁で形作った虎口(ウ)を持ち、虎口前には現在も石段がよく残っています。

虎口を入ると整った石積みの井戸が見られます。その東には東西約17m、南北約8mの礎石を伴う基壇状遺構があり、規模の大きな建物があったことが窺えます。



4郭の石垣と石段(西から)



5郭虎口と石段(南から)



5郭から2郭を見る

北郭群は1郭の北に延びる尾根上の2段の郭と2郭の北に造られた2段の郭の二つの郭群で構成され、それぞれから北麓と連絡する通路(a・b)が伸びています。北麓から主郭へは北郭群を経ないといけないことから、主郭の北の守りということが出来ます。郭群の面積は小規模ですが、2基の石組井戸が残っています。

以上が鏡山城の主要部といえます。主要部の周囲に目を転じると、東西の尾根筋を大規模な切岸と堀切・堅堀で遮断し、それを基点に南北両斜面を埋め尽くすように畝状堅堀群を廻らせています。特に3郭の南側のものは大手道(A)からよく見え圧巻です。また、2郭の北側の堅堀群は一部が登城路(C)となっており先駆的な例といえます。

主要部から堅堀群を隔てた南側には南郭群があります。郭群の最高所には虎口(エ)を備えた郭を置き、そこから南麓まで数多くの小郭を配置しています。南端には郭群で最大の規模を持つ郭があり、東側に土塁を備えています。

南郭群は、主要部の東西を区切る大堀切から南麓まで延びる堅堀に囲まれた区画の中に含まれており、主要部を内郭とする南郭群が外郭に相当するといえます。一方、主要部からやや離れた東西北の三方にはそれぞれ簡素な出丸が造られています。1郭の西約200mに位置する「藤の丸」は最も規模の大きな出丸で、西と南に堀切を備えています。5郭から北に延びる尾根に築かれた出丸は「東出丸」と呼ばれ、遊歩道で一部破壊されていますが、端部を石積みで固めています。主要部から東に延びる尾根上には、主要部側に向けて小規模な土塁と堀切を備えた区画があります。